

第31回アクラスZOOM寺子屋「感想」

感想をお書きください。

生成AIや自動翻訳が発達し、学び方も多様化する現代において、教室で生身の先生が教えることの意義を、私自身強く信じてやってきてはいましたが、今日のお話をお聞きして、改めてその認識を深めることができました。目の前の学生、学習者に、伝えたいこと、手渡したいことをちゃんと伝えられる教師であるよう、一瞬をすくい取れるよう、覚悟を持って臨まなければと、気を引き締める機会になりました。ありがとうございました。

大学院の図書館に大村はま文庫があったにもかかわらず、当時、国語と日本語教育は別物だと思い大して書物を読まずに過ごしていました。嶋田和子先生から大村はまにつながるとは何かのご縁を感じます。年月を経て、あらためて書物を手にし、全く初めて読んだ感覚を覚えました。留学生を対処していると、ほとんどの留学生は「日本語力」から判断される場面が多く、生活者に対する日本語教育とは全く違った見方がなされることに日々疑問を感じつつ、とはいえ目のカリキュラムに沿って一生懸命授業を行い、業務をこなす日々です。それでも、リアルな言葉を届けたいと思ってきましたが、「「なま身」の先生が同じ呼吸をしながら生徒という…なまなましいところをわからせること」はそうたやすいことではありません。覚悟と信念が必要です。

嶋田先生が冒頭でおっしゃった「優れた先人の声には耳を傾けることが大切」ということは、刈谷先生のお話から十分に伝わってきました。最近、大村はまとちょうど同じ時代を生きた「戦前から戦後にかけての家庭科教育推進者」の自叙伝と言われるものを読んでいます。大村先生はじめこの時代に教育に携わり必死に生きてきた教師は、猛烈な教育に対する信念を持っていたと感じます。教育が、理屈としての知識の切り売りに流されがちであることに警鐘を鳴らし、個々を尊重し、人間ひとり一人の幸福に結び付けながら教育を考える。この原点を今日のお話から再確認することができました。

尾道での講演のお話は胸を打たれるものでした。発せられる言葉を大事に受け取り、言葉を発したその人を尊重する姿勢、見習いたいです。また、授業の準備は際限なくいつも追われてしまっていますが、大村はま先生に「それは学生ではなく、教師の怠慢ですよ」と言われないように、自分の授業に真摯に向き合っていきたいと思います。

今日は本当にすばらしい時間でした。

刈谷先生のお声、お話しのかたは心に響き、講演後も心地よい余韻が残ります。

ありがとうございました。

今日参加できたことは、奇跡と思われるほどラッキーでした。これに参加しようと思う出来事があったからなのですが、それは恵みだったのだなあと思っています。大村はまさんの本は一冊だけ読んだことがあるのですが、恐れながら、実はあまりピンときておらず、刈谷先生のお話で、驚くほど本質的に大切なことがあったことを初めて認識できた次第です。おかげさまで、大切なことを、見えているようでわかっていなかった自分に気が付きました。これからもこれをきっかけに、学びを自分なりに深めていきたいと思います。新学期が始まる前に、このように大きく扉を開いていただけたこと、心より感謝いたします。またこの機会を「今こそ」とご提供くださった嶋田先生にも心より感謝いたします。また、ブレイクタイムで一緒にいた皆様、素晴らしくまとめてくださった先生方にも感謝いたします。またいつかどこかで一緒にできますように。本当にありがとうございました！

刈谷先生、嶋田先生、本日は貴重なお話を拝聴でき、心から感謝申し上げます。

私は日本語教師と介護福祉士として、ネパールにある送り出し機関の日本語学校で、これから日本に来日する予定の技能実習生にオンラインで日本語の会話と介護の日本語を教えています。

日頃オンラインでの授業をする中で、やはり対面授業との温度差を感じています。学校の教室にカメラを設置してクラス全体を映しているため、画面越しではどうしても学生たちの細かな表情の変化などを感知することが難しいです。マイクの問題もあり、全員の声が拾えません。なので私は必死でそれらを見ようと、感じようと、前のめりで授業をしています。

どうしたらみなさんの日本語が上達するか。日本語を好きになってくれるか。

私は、「日本語を教える」ということの前に、「先生（私）に会いたい、話したい、自分のことを伝えたい！」という気持ちにさせる、私がみなさんのモチベーションの源になりたい、みなさんのやる気を引き出すきっかけになりたい、そう思っていました。なぜなら言語とは、目的ではなくて、そういう気持ちを表すための道具、手段だと思うからです。

そのために、オンラインであっても、一人ひとりに声をかけ対話をしたり、できるだけ自分の自然な姿を見せるようにしたりと、親近感を持ってもらえるようにしてきました。ネパールの人たちは日本人に似てシャイな人が多く、初めは静かで、なかなか日本語も出てこなかった教室も、だんだん発言も増え、明るく活発でお互いに笑顔のある雰囲気の中で授業ができるようになりました。ただここで、今日の刈谷先生のお話の中であった、「ゆるんでいない、キリっと引き締まっている、身の引き締まるような空気感」は全然出せていないということに気づきました。ただ楽しいというだけではなく、集中して打ち込んで一生懸命に考えてもがく、そういった学ぶこと自体の楽しさを体感してもらえるような授業を考えたいと思いました。

あるとき、現地で働いている日本人スタッフが一時帰国することになり、学生たちからのお手紙を携えて会いに来てくださいました。そこには、なかなかオンラインでは見えなかった学生たちの心の中が書いてあり、私は思わず涙してしまいました。思いをもって伝えれば、伝わるのだ、ということがわかりました。一人の女の子が、私に手紙を書くということが、今までで一番のモチベーションになった、と書いてくれましたが、まさに私が思い描いていたことが伝わっていたんだと実感した瞬間でした。

今日の刈谷先生のお話を拝聴していて涙があふれ出て止まらなくなったのは、「熱」のある想いは、時代を超えて、電波を伝い距離を超えて、誰かの心に届くんだということが、わかってはいましたが、改めて、こうして刈谷先生を通してはま先生の強い思いが、没後20年たった現在にもひしひしと伝わってきたからだと思います。熱い思いは必ず伝わる、届く。

私も、本気で学生一人一人のことを思い考え、日本に来てよかった、日本が好きだと思ってもらえるように、また、受け入れる企業や地域の皆さんにも、彼らが来てくれてよかったと思ってもらえるように、大事に育てたいと思います。

でも、私の熱意はまだまだ足りないです。はま先生の足元にもおよびません。もっともっと思いの熱量を上げ、学び続けなければならない！と身が引き締まる思いがしました。

本日お聞きした心に響く言葉を胸に、明日への新たな一歩を踏み出そうと思います。素晴らしいお話をお聞かせいただき、心より感謝申し上げます。

・日本語教師として教えることに限界を感じる度に、仕方がない、できるだけことはやったと自分に言い聞かせてきたが、諦めの気持ちが入ってなかったか。刈谷さんは「教室での学びは週に数時間、その人の時間のほんの一部でしかなく教師側に限界があるのは当然のこと。ならば何ができるか？日本語が好きになって上手に使えるようになりたいと本人が思えればいい。教師はその土壌を耕し苗が育ちやすくするもの」と。この考え、頭では知っていた。ずっとそう考えてやってきたつもりだった。でも、私は本当に理解していたのだろうか。もう一歩進めて「自律のための日本語教育」という視点からやってみよう。

・同じ教材を使うことの慣れ、あるいは組織で決まった教材を使わなければならない時、「そこに今日の一滴を添える」と命が生まれイキイキすると。誠意と真面目さ愛情だけではダメ、それは教師として本来普通の姿。一滴はワンポイントではない。豊かな源泉が自分の中にあるこそ、あるタイミングで心の底からポンと出る生のもの、準備なんてできないもの。常日頃から周りをよく見て研鑽しておかないといけない。

・外国語を教えるということは、正しい言葉を教えること、でも知識のレベルに留まらずにそれを超えて、人の言葉として、その人の内にあるものを引き出すようにすること。これはOPIで得たことに通じる。でも最近、対話型AIでもそれに近いことはでき始めている。ただし、人の心に伝わる言葉、心の底から出てくる気迫はAIには真似できない。じゃ私は…。

第一言語と第二言語では、また、日本人に国語を教えることと、来日した外国人に日本語を教えることでは、求められるものも、与えるものも、違うのではないかと考えていました。

しかし、今日の講義は、そのような違いを超えて、何を教えるのではなく、何のために教えるかまで考えさせてくれる、素晴らしい講義でした。

拝聴の機会を与えていただき、ありがとうございました。

きょうの最高の学びは、きょうの1滴でした。教科書をただ教えるだけではなく、今日の1滴を入れる。明日からすぐに実践したいと思いました。刈谷さんの経験された小学生の話から涙涙の感動の始まり講座でした。私は、高校で日本語を教えているのですが、色々なバックグラウンドの生徒がいて、やる気のある生徒もいれば、やる気のない生徒もいる。その生徒を振り向かせるためのヒントをきょうの講座でたくさん、学びました。心の底から覚えよう。と思わなければ、忘れてしまう。得に高校生ともなるとプライドもあります。簡単な事を教えるのではなく、精神的レベルにあった教えが必要。言葉を好きになってもらう。スマートな答えを出さなくてもいいんだ。きょうは、書ききれないほど、わたしが学ばせていただき、教える人が学び続ける人であるべきだということも私が学んだ1滴です。大村はま先生の本の中にもありました。自分がわかるということと人にわかるように伝える事は、全く別。私もことばを磨かなければなりませんね。

刈谷さんの大村はま先生との出会いもそうですが、今回の私の刈谷さんとの出会い、我が家の本箱に並ぶ刈谷さんの書籍の数々も大切な宝物です。あっという間の2時間。本当にありがとうございました。感謝です。

冒頭に嶋田先生が言語観・学習観をもう一度考えたいとおっしゃったのを聞いた瞬間から、今日の寺子屋に出られて本当によかったと感じ、その思いはまだ当日の夜ですが今も変わりません。私は大学院では日本語教育と国語教育の連携について考え、研究室の先生からも大村はまさんの教育についてお話を聞いていました。また、様々なところで大村はまさんのお話を見聞きしていましたが、それはまとめてくださっている荻谷さんのおかげなのだなということがわかり、教育について記述することの大切さを改めて実感いたしました。

本日のお話および対話の場面で、本当にたくさんの「ずっと覚えていたい言葉」をいただきました。自分が日頃教育実践の場で感じていたことはこれだ！とか、現実と向き合ってもヤモヤしていることを昇華させてくれたと思います。

現在は大学での日本語教育と企業研修を作ることをメインに活動しています。特に企業の外国籍社員向け研修では、学習者評価や点数化、日本語の正しさ（本日改めて”ふさわしさ”を思い起こせてよかったです）を企業から求められることが多いのですが、「ほんとうの言語生活者にしたいと思いつめていただけです」「型を持たない人（私も僭越ながら研修内容を毎回ブラッシュアップするよう心掛けています）」など、心に滲みることばかりでした。また、「力は使い切った時に伸びる」というのは、学習者にとっても教育者にとっても大きな励ましの言葉です。研修受講者が「インタビューテスト」で言葉を絞り出して、その場ではまあまあの出来、くらいだったのが、次の授業では「あれ？伸びた？」というくらい変わり、吸収力もすごかったことを思い出しました。学習者たちとともに、私も力を使い切りながら、伸びていきたいと思います。久々に、深いところからやる気が出ました。ありがとうございました。

今日お話をお聞きして、今後の私の日本語教員としての心構えが大きく変わりました。恥ずかしいことですが「なんとなくの予定調和、色々なレベルの学生が一つのクラスに混在する中で真ん中くらいに合わせた授業」に陥りがちだったと反省しました。

大きく心に残った点を3点挙げさせていただきます。

①持っている「力」は使い切った時に伸びる…「力のある学生」も脳をフル回転させることができ「大変だけど楽しい！」と感じられるような授業を目指して明日からの授業について準備し直しています。

②今しかないタイミング…ぐだぐだになってしまったように見えた生徒会長の女の子の挨拶について、今しかないタイミングでコメントされた様子が目に浮かび涙が出ました。褒める時、フォローする時、注意する時「絶対に今言わないといけない」というタイミングを逃さないように気をつけようと心に刻みました。

③「良いものがあったら拾おうでは良いものなど見つからない、常にアンテナを張り巡らせ探し続けてこそ良いものを見つけることができる」…アンテナを高く張るためまずは大村はま先生のご本を読んで勉強しようと早速注文しました。

これから「引き締まった空気があり、学習者が楽しんでいる教室」を目指して参ります。

本日は本当に貴重なお話どうもありがとうございました。

私は日本語の指導をしていて、特に子どもとの学びの場では、ある文法項目について例文を示し代入練習をするという学習や、抜け落ちている箇所をワークを使って学習することなどにとっても違和感を感じていました。今日、「大村はまのことば」を伺い私の感覚は間違っていなかったんだと思いました。すべての「ことば」がここに響きましたが、なかでも「子どもはどんな時でも、自分が打ち込んで一生懸命になっていることでなければ、ものを考えないし、ことばの力もつかないし、なんにも覚ええないと思うのです。覚えるということだけを考えても、やはり印象に残る時、感動している時でなければ、ものを覚えることはないのではないかと思います。」「ほんとうに自分の気持ちが表せることばでなくても、とにかく適当に答えるというのは、こわいことではないでしょうか。」ということばに共感しました。私が感じていることを言語化してもらっているようでした。子ども達が、何か伝えたい、表現したいと心から思えるような学習を真剣に考え続けようと思います。そして、「今日の一滴」を授業に取り入れられるよう、日本語教育だけに限らず様々なことにアンテナを張って学び続けて行こうと思います。最後に、日本語学校での授業で、学生からの質問に恐れていたのですが、学生たちの前で一緒に考え、私自身の考えていることも開示してみようと思いました。多くの気づきと学びの機会をありがとうございました。

このところ、本国でもある程度の地位になり中年にさしかかった方に、プライベートクラスで教える機会が多くなり、日本での仕事を見据えたオーダーメイドの日本語指導をメインにしております。

先月まで集中授業をした方は、奥様は日本人、日本での滞在も3回目でごなれた会話もできる方でした。授業後に臨む一年間の専門分野の研修は日本語で行われるため、その分野の語彙の習得が最優先と考え、語彙指導に注力しておりました。日本語クラスも終盤に入ったある日、「このことばは何度もできましたよ」と注意したところ、「否定するようなことを言わないで、やる気がなくなる」とおっしゃって、休憩に行ってしまいました。優秀な方で、予定調和的な反応をしてくださることが多かったため、正直ショックでした。しかし、本日のお話をお聞きし「新鮮さ」を忘れ「慣れ」がでてきていた、こちらの心のゆるみがでていたのだと思います。また、おもねるわけではありませんが、大人であっても、小学生の女の子に大村先生が声をかけられたように、否定ではなく、肯定的な声かけがやる気を促すとも思い至りました。

日本語教師歴も25年以上たち、経験は長くなった反面「引き締まった気分を作る工夫」を忘れがちかもしれません。今日教えることに添える「一滴」を心に、学習者を「日本語生活者にしたい」と思いつめる」教師でいたいと思いました。本日は、大村はま先生の貴重なお話をありがとうございました。

日本語教育の場においても「自律した学習者」とよく言われます。どうしたら自ら学ぶ学生に寄り添えるかと日頃から考えていました。

中学生のとき、大村はま先生の教え子であり、最も身近で実践を見ていらっしゃった刈谷さんのお話を聞いて、教師のことばを学ぶことに対する熱意は、中学生の心も惹きつけていたのだと思いました。しかし、そのために教師自身がしなければならぬこと、学習者への向き合い方など、大村はま先生の実践から見習うべきことがたくさんあります。

一番印象に残ったのは「今日の一滴を持ってくる」ということです。大切なことは必ず覚えておくという考えにも通じると思います。教師が学習者に伝えたい大切なことをどのように伝えたらいいか、多くの知識を散漫に話さない、思いついたことばを意味もなく使わない、とのことにも共通の考えがあるのでしょうか。

畑を耕して、いい土壌にする。いい土には、種から芽が出て、やがて花が咲く、実がなる。文科省の指針によって、どのような日本語教育が規定されたとしても、畑を耕す人によって、どのような日本語学習者も育つと心に刻んでおきたいと思いました。

刈谷先生のお話を伺って、大村はまさんの学習者への向き合い方や思いが強く胸に響きました。お話の中で「教師が知識や教え方、その授業の進め方を十分に考えるということは当たり前のこと」という言葉もありました。教師の仕事としてそれはベースにないといけなけれど、そのベースのさらに土台になるのが教育に当たる人の心なんだということを強く感じました。

その「心」を言葉にしてみるとどうでしょうか。「温かく、でも、感情に溺れずに学習者を一人の人として見つめ、その将来を思い、成長を支える」ということかもしれません。そして、この気持ちは、人を導く立場にある者に必須だとも思いました。教育の場で言えば「学習者」にとって、どんな言葉がその支えになるのかに思いが至るようになりたいと思います。

人の成長を思う気持ちが醸造できたらいいなあ……。そのために人としての知恵や知識を磨いておきたいなあ……。そんな気持ちになる時間でした。

先日は貴重なお話をありがとうございました。

一つ一つのお話を聞きながら、私の授業の中にどう生かしていけるだろうか、何が足りないのかを思いながらうかがいました。

精神的なレベルに合った学びにすることは、特に初級ではなかなか難しいと思っていましたが、それに関するお話もあり、何ができるのかと考えさせられました。また、力は使いきったときに伸びる、というお話もありました。この二つを掛け合わせて授業構成を組み立てるのはどうか、などとお話を聞きながら考えていました。

今、ゼロ初級ではありますが能力の高い中学生を支援しています。両親に日本に連れてこられたという不満もあるようで、いつもつまらなそうにしています。この生徒が、日本語力が低くても自分の考えや感情を発信できるようなるためのヒントをいただけたと感じています。

大村はま先生の「力は使い切った時に伸びる」という言葉は、日本語教師が学生を見るうえで大切な視点を提供してくれているように感じました。学生は持っている力をすべて出し切る経験を通してこそ、次の力を得ていく。そう考えると、課題や発表の場面で迷ったり途方に暮れたりしている姿は、決して可哀想といったものではなく、むしろ成長の入り口だと肯定的に捉える視点が必要であると思いました。

また、「説明しようとしてことばを動かすと、たとえ説明できなくてもことばの力は磨かれる」という言葉も印象に残りました。学生が必死に言葉を探し、うまく言い切れなくても、その過程でことばは自分のものになっていく。言葉にしようとする努力そのものが、まさに学習の核心なのだと改めて認識しました。

学生が日本語を使う中で直面する行き詰まりやもどかしさは失敗ではなく、ことばの力が育つ瞬間なのだと捉えていきたいと思いました。

大村はま先生のことを知ったのは、新聞記事でした。衝撃をうけた勢いで、苅谷先生の「教育実践史のクロスロード」他、検索して出てきたサイトは、ほぼ拝読したと思います。大村先生のことばは一見やさしい。偉業であり異業であり、魂の授業であったことに強く惹かれつつ、ではどうやって？と、お手軽に役立ちそうな事例にしか、気が向いていませんでした。

① なによりもまず苅谷先生のお話こそが、人が人に言葉を手渡す生そのものでした。ひとり掲載記事を読んだぐらいでは、ごっそりぬけ落ちていた核心が、具体的な事例によらないでも、かたちを取ってすっと立ちあがったような、大きな何かを私は受け取って、興奮しました。

② それを支える教師の声・トーン、話し方・伝え方（の技術）はもっと研究されてしかるべき事。現場で「ことばを手渡す、届ける、伝える」のが教師の本懐ならば、確かにおろそかにできない。

私は南伊の田舎に暮らして22年になります。第二言語で生活する中で、話しを最後まで聞いてもらえない、こちらを見もしない、最低限の敬意を持って接してもらえないことに人生で初めて直面して、随分クヨクヨしました。それもこれも私のイタリア語が拙いせいだ、日本語訛りせいだと決めつけていましたが笑、伊和通訳やコーディネータをするうちに、「どうやらイタリア語だけの問題ではないと」笑。話しを聞いてもらえるひとはどんな話し方をするのか。私との違いは何なのか。今では魅力的な話し方ウォッチングが趣味となっています。日本語の先生には画面越しでも、ああこの先生の授業を受けている学生さんはいいだろうなとみほろけてしまうような話し方をされる方が多いですね！声・トーン、話し方、伝え方から切っても切れない人間性は考慮に入れないとして、2だけは、テクニクとして真似てみることから始められると思いました。

③ もうこれは永遠の課題ですが、「瞬時に好機をとらえて、ことばを手渡せるか。」苅谷先生は「1回しかないチャンス」とも仰った。一回しかないチャンスとはなんと厳しいことでしょうか。

大村先生は生徒さんお一人お一人と真剣な対話をされていたのですね。対話は双方向的です。講義の内容ということならば準備はできます。でも、その場で、即時の、しかも一回性の対話は、準備したシラバスなど軽々と飛び越えていきます。私自身を鑑みるとこの3年間で、ちょうどいいタイミングでアドリブで当該の話題を導入できたなと思えたのは、わずかに数回だけです。

大村先生は40人からの生徒さんに相対して、好機をとらえて、いいかたちで当該のことばを浮かび上がらせて、そのことばを手渡していた。更に驚くべきことに一人一人の本領を見抜く力量を念頭において。

③も、そもそも生活者としての深い知識と力量がなければできないものではありませんが、「好機をとらえてことばを手渡した時、人は感動したり、納得がいたり、面白いと思う。そのように何かを強く受け止めた時、打ち込んで一生懸命にものを考え、覚えるのだ」という部分、肝に銘じます。

④ 上記③の知識そして人間力は私では間に合わない。ですが、苅谷先生はヒントも下さいました。それは学習者の問いに答える方法として「頭の中、思考の過程を開示してみる」です。

学生からは時に、答えには統合的な知識が必要なような、物ごとの本質を問うような質問を受けることがあります。知識が足りないことも、イタリア語が理解できない事もあります。「下手なことは言いたくないので、来週まで宿題にさせてください」と、持ち帰って“キレイな”イタリア語の説明文にしてみました。学生さんにとってはさぞかしつまらなかっただろうなと思い当たります。

返答に窮した時、「自分の頭の中、思考の過程を開示してみる。そして、この時、ことばを諦めない。」私自身が、第二言語で苦戦しながら言語化してみせる、これも大きな学びとなりました。

大村はま先生の勉強会で感じたこと

大村はま先生の勉強会に参加し、もっとも強く心に残ったことは「学びは教師が与えるものではなく、学習者自身がことばをつかみ取る瞬間にこそ生まれる」という確信であった。

私は日本語教育や人材育成研修の現場で、学習者が「心が震え、声が生まれ、身体の動きとなる瞬間」を重視している。これは大村はま先生が目指した「自分のことばを生み出す営み」と深く交差する。与えられた答えではなく、自らの身体や声を通じて獲得したことばは、学習者にとって揺るぎない学びとなる。

一方で、現代の教育や研修の現場では効率や成果が強調され、プロセスを省きがちである。だが、大村はま先生が重視した「ことばの生成の過程」こそが、人の成長に不可欠な基盤であると私は改めて感じた。

AIが教育に浸透する今、課題は「効率的な知識習得」と「人間にしかできない創造的学び」をどう結びつけるかである。AIは支援の道具となるが、そこに温度ある学びを与えるのは人間の心と身体だ。大村先生の理念を現代に生かすならば、AIと人間が補完し合う学びの場をデザインすることにある。勉強会で得た気づきは、私自身の教育実践に一層の指針を与えてくれた。

はま先生の「ことばの教育」の貴重な息吹のときを、苅谷さま、嶋田先生、そして勉強会の皆様とともに過ごせたことは、非常に豊かで、貴重な体験となりました。どうもありがとうございました。

刈谷さんのお話を聞いて、大村先生の「授業にどのように今日の一滴入れるか」というお言葉を毎日思い出しながら、日本語の授業をしています。これまでも学生が予想できない、わくわくするような授業を志してきたつもりでしたが、大村先生のこの言葉によって背中を押される思いがしました。また、「教室に、非常に引き締まった気分を作る工夫をしなければいけない」ということも、私の迷いを払拭してくれました。インドでは、特にコロナ禍を境に若者の顕著な変化が見られました。それまで20年以上、日本語を教えてきましたが、今回の急激な変化には私も面喰い、全身全霊で取り組まない学生たちが増えたことにより、教室という空間での教師と学生とのエネルギー交換がうまくいかない、と感じることも多々あります。そんな中でも、やはり毅然として、引き締まった気分を作る工夫をすることを自信をもって続けていこうと思いました。教室での授業とは「土を耕して、苗を植える」ことを忘れずに、これからもがんばっていこうという前向きな気持ちになりました。本当にありがとうございました。

大村先生のことばに触れるといつも落ち着かない気持ちになります。気持ちが引き締まるのですが、それ以上に身が引き締められるような感覚がありました。今回、先生のお話を伺えることになり改めて読み返して久しぶりに味わいました。

苅谷先生のお話を伺い、「教室で人が教える」重要性や意義を改めて感じました。同時にそれが現実的には得られない環境にある人たちに対して、これから私は何をしようか、ということを変えて考えさせられました。今までは迷いもありましたが、今は、より前向きに考えられるようになりました。

学ぶ人ひとりひとり、子どもたちの様子が見えるようでした。そこそこできる子、そうではない子、勉強が好きではない子、いろんな子に対してそれぞれの対応をし、前向きになるような準備、しかけをされていたのだということも。これを準備しておき、適時に渡すこともまた簡単ではないと思いますが、私もできる範囲でやっていきたいと思います。

この度は貴重な機会をありがとうございました。

この約120分間の時間をオンラインで場所という制約を超えて受講できたことを嬉しく思います。この時間に参加できたことで、刈谷さんのお話によって、この世で会うことのできなかった大村はまさんという国語教科を通しての一人の教師の生きた時間、時代をお裾分けしていただけたのだと感じています。

形式的には「講話」をうかがったはずですが、語られる話の中の景色にたち、「教える」ということの一つの姿を見ている授業な気持ちに途中からなりました。問いかけ、話す、伝える、言葉を使うという時に生じる間の意味やそこに至る経緯その時にしか存在しない条件。教師としてそれを受け止め、引き出す大村はまさんの息遣いを近くで感じてきた刈谷さんという語り部を通してその様子を私たちはその刈谷さんの眼差しから見つめたのではないかと思います。普段、私たちは実践の報告を実施者によって綴られたものや、語られたものを受け取ることが多いですが、今回はこの実践の受け手、見つめ手としての刈谷さんの視点、感受性、表現というその語りのあり方によって導かれ、考えさせられる時間となりました。

印象的だったことの一つは、語り口が決して熱に任せただけものではなかったことです。むしろ抑制されたトーンで、ことば一つ一つが丁寧なスケッチのように、断定することなく、幾重にも重なる線で姿やあり方が描き出されていくような印象でした。それによって描かれた直接出会ったことのない大村はまさんのあり方、振る舞いやその背後の考えの息遣いが刈谷さんの話し言葉という筆致で形作られ、その中にある確かな信念や、問いや投げかけの深さへの気づきを差し出してくださっている時間の中にいたように感じました。

とても大きな存在として語られている方ということは知っていましたが、そのあり方がこれだけ多くの変化を経た「今」という時代の中で持つ意味。人が人から何かを学び、特にその礎となるとされる公教育の小学校課程部分で伝えられていくことの意味というものに焦点があった今回のテーマでしたが、学習者としての対象の範囲などの違いはあれど、どういう姿勢で学生の前に立ちたいのか。伝えたいことをどう扱い、どう渡しているのか、いけるのか。それを、自らの中で静かに考え続けること。その大切さを改めて見つめてみよう、それでいいのだと思える時間になりました。今回もいい時間となりました。誠にありがとうございました。

アクラス研修では心に残るお話をありがとうございました。大村はま先生から、長い時間をかけて直接受け取られたものや、大村先生のお言葉から得られたものまで、たくさんのお話を聞いて、本当に良かったです。本を読んだだけでは、はっきりと理解できなかったことばがお話を聞くことで、深く理解できたように思います。「なま身の先生が、そこに同じ呼吸をしながら生徒といふことこのいちはんの効果は、なまなましいところをわからせること」という部分や「自分の心を文字化する」など、思い出しながら進んでいこうと思いました。「持っている「力」というのは使い切った時に伸びるものなのです。」という言葉を支えにして、これからも自分自身が学び続けていきたいと思っています。

苅谷さんのお話は、大村はま先生が、今、そこにいるかと思うほど生き生きとして、その姿が心に思い浮かべられるようでした。大村先生の実践、ご経験、研究に裏打ちされた話を、生きている人が語り伝える「生々しい迫力」に感動しました。ありがとうございました。

私は、今回、学校教育における「国語」の話を伺い、自分がたどった日本語教育の理念を振り返りました。物事をわかりやすい二項対立にしてきた苦い経験です。

教科書の教材を読み、わからせ、試験でその理解を検査することが国語教師の仕事ととらえられがち、というお話がありました。日本語教育は、文型を教え、練習し、学習者が覚えたかどうか試験でその理解を検査するのがお仕事、となっている場合があります。

単純化しすぎではありますが、新人日本語教師の私がそうでした。

次の文型は、どのように導入したらわかりやすいか、どの順番で練習を進めるか、どんな冗談を言って教室を楽しいものにするか考えていました。

時が過ぎ、大学院に進学した私は「人は言葉を使って自分を表現する、日本語も使うことでその人の考えが磨かれていく（単なる道具ではない）」という考えに接し、目が醒めたような気持ちがしました。残念なことに、十分に理解も至らず実践もできていないのに、私はそれ以外のものを批判する姿勢を持ちました。

具体的には、昔、自分がやっていたこと、文型をひとつひとつ教え知識を積み上げるやり方（文型積み上げ式）「正しさ」に比重が置かれやすいやり方について、それでは自分が言いたいことが言えるようにならない、など考えていました。

しかし、外国語を学ぶのに「言葉を記憶する」のはあたりまえです。ある言語を効率的に学ぶために、発話できるようになるまで繰り返し練習することは大切です。にもかかわらず、私は「言葉を使って自分を表現する」という考えと「単調になりがちな文型積み上げ式」を二項対立にしたて、正しさを大切にするあり方に異議を唱えていました。

「言葉を使って自分を表現するのはその通りだけど、その前に日本語が正しく運用できるようにする必要がある」というスタンスの先生も多く、もしかすると、そう主張する人たちは、私と同じように二項対立で考え、相手を「敵」認定しているのかもしれない。

なぜ、そんなことを振り返ったのかというと、大村先生の「ことばの教育」は、誰もが絶賛するにもかかわらず、現在の国語教育で広く実践されているわけではない、というお話からです。

大村先生は「本当の言語生活者、ことばを使って生きていく人を育てる」ことを目指されました。「ことばを使って生きていく」といいますと、抽象的な概念にも思えるのですが、大村先生は「こういう言葉の力を教えたい」という確固としたねらいがあり、そのために教材研究をおこない生徒さんたちに教えました。

何か、普通の国語教師は、それは素晴らしいけど現実的ではない、私が今できる精一杯は、教科書の教材を読み進めることと、考えているのかしらと思ったのです。自分が二項対立で考えがちなものではないかと違っているかもしれませんが・・・。

もちろん大村先生も苅谷さんも、現実がどれほど大変であってもできることはあると、同じことを教えるのでも「今日の一滴」があれば、というお話をくださいました。

さらにどうすれば「今日の一滴」を授業に入れられるのか秘訣を教えてくださいました。日々の生活のなかで「取材をする」。普段からアンテナをたてて、自分自身を耕す、それを今日教える人に、その人仕様に教えていく。それができれば、私が直面する二項対立も解消していくかもしれません。

これからも、大村はま先生の言葉を繰り返し読みます。
ありがとうございました。

寺子屋に初めて参加させていただきました。
「教えるとはどういうことなのか」「一人ひとりの学習者に向き合うとは、どういうことなのか」を学ぶことができました。
講演中は、感動して涙を流してしまうこともありました。
「持っている力は使い切った時に伸びる」「言葉を足りないと思わせる」「ことばのトーンで教室の雰囲気をつくる」「今日の一滴をどう授業に持ち込むか」など、たくさんのお話をうかがい、簡単ではないけれど少しでも自分の授業に取り入れたいと思いました。
教師の役割を再確認できたと思います。本当にありがとうございました。

お話を伺って、教師って素晴らしいなということと同時に、覚悟と厳しさについての自覚はあるかと鋭く問われた気がしました。
また、私は日本語教師養成の仕事もさせていただいているので、マニュアルも大切ですが、この想いを伝えることを忘れてはいけないと肝に銘じました。
そして魂の宿っていないものからは何も伝わらないのだと改めて感じました。
一回一回の授業を慣れではなく、新しいものとして学習者に提示できるようにすることの大切さと難しさを忘れずに頑張ろうと思います。
あの後、大村はま先生関係の本を何冊も購入しました。そして、読んでいて、私の小学校の国語の授業も単元授業でとてもとても楽しかったことを思い出しました。私が今日本語教師になり、教師養成に関わりたいと思うのも、ひょっとしたらそこにルーツがあるのかもしれません。
お話を伺って、自分の中にある炎を掻き立てていただいたように感じています。次は私がこれを広げていく番なのかもしれません。
静かに、でも確かに厳しく鋭く燃えて行きたいと思います。本当にありがとうございました。

おそらく嶋田先生を通じて知った大村はまさんがご存命だったときの子供達とのやり取りを苅谷さんの語りを通じて知ることができて、より大ファンになり、また学習者との接し方を考える機会になりました。

特に印象的だったフレーズは、小学校の教室で女の子が大村はまさんのお話を聞いて発表してくれた「忘れたくないって心から覚えておきたいって思うこと」、

持っている「力」というのは使い切った時に伸びる、レベルに合ったものを提供する「手引き」、そこに今日の「一滴」を持って来る、こんなフレーズが刺さりました。

そして、ラッキーにもBORで苅谷さんとご一緒でき、この感想を直接お伝えすることができ、褒め言葉についてお話しした時、さらにご助言をいただくことができて、感激でした。

嶋田先生、こうやって、いつも素敵な方々との出会いを繋いでくださって、心から感謝申し上げます。

自分に対して、また、他者に対して自分の魂を乗せることができるのが言葉だとつくづく思いました。それが無い言葉の教育とは言葉というものに対する冒涇だと思います。この言葉があるから思考が練られます。「覚えておきたいもの」を言語化するプロセスを通じて、その内容はさらにより豊かになり、一人一人にとって価値のあるものとなっていきます。この言語化のプロセスを支援することが教師の仕事だと思いました。

本当にありがとうございました。糧になりました。

2025年9月28日の寺子屋ワークショップでは、「大村はまの实践」という命題で苅谷夏子講師をお迎えして学びを得ました。参加の機会をいただきまして心から感謝します。

「教える」という現場に関わった最初の教科が国語だったにもかかわらず、「大村はま」というご尊名を存じ上げませんでした。偉大な教育業績を残された方を知らなかったとは。今回、小学生の時、入りびたりだった図書館で膨大な本を眺めながら一生かかってもこの全ての本を読み尽くすことはできないなあと呆然とした感情と似たものを久しぶりに感じました。様々な教育現場で理論と実践に身を投じながら学ぼうとすればするほど宇宙ほどの知見がたち現れてきて己の無知を突き付けられるのです。

今、勤務先の大学の図書館からご著書の1冊の「教えられるということ」を借り拝読中です。

寺子屋参加でメモをたくさん取りながら、最終的に私の中でキーワードとなったものは

3つです。1.「温故知新」2.「大海の一滴」3.「血縁を超えた遺伝子」です。故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る、という論語からの言葉は私にとって座右の銘の一つなのですが学問の基本に必要な精神として認識を新たにしました。東京の高校で国語を教えた後にアメリカへ行き、高校で日本語を教え、帰国後、英語を主体に日本語や国語も教えながら今に至っていますが、帰国後、私を支えていることは研究です。現場で生徒や学生と向かい合う時、どのようにレッスン計画を練るか、どういうことを達成するかを熟考して、さまざまな研究論文を調べます。その中には何十年も前の興味深い実践や未知の理論に裏付けされたものがあり時を超えて思いを共有するロマンや情熱や不思議な感覚によく囚われます。大村先生のご著書の中に研究なしの教員はあり得ないという章があり、挫けそうな心にまた火が灯りました。現場のある同僚から研究や論文は自己満足だと言われ、それは違う、純粋な教授や学問の改善や発展に寄与するものである、それが非常に小さな大海の一滴であろうと、と反駁しながら、正直なところ日々の厳しさに苦しみ続ける長い年月を送っている辛さがあるからです。大村先生の教師の資格についての言及がありました。また教師の仕事の章での、教材の発見や職業意識については、共感と日々の実践への浄化をいただいたような思いがしました。常に教材を考えて探している、例えば料理している時やシャワーを浴びている時、何げなく外の景色を眺めている時、全てのものが教材に思えて家中がゴミだらけになったこと（チラシや不要な箱やいろんなものをため込んだ）、思いを巡らすことに集中してシャワー中にシャンプーをし終わったのか分らなること、そして閃きをプランニングして準備して授業実践し、成功したり失敗したりを繰り返して続けたこと一毛な思いと疲れに覆われていた今日この頃に出会えたこの知見に感謝したいと思います。

望まぬアメリカからの帰国で全てを失い絶望していた時に、大学の教授から研究の真髄として「知の大海の一滴」一たとえ微小なものであってもその集積から未来の知の構築に寄与するという言葉が空っぽになった体中、心中に染み渡り、それを信じて歩き始めての今日をまた明日に繋げる力をいただけたと思います。図書館には33冊所蔵がありましたのでこれから少しずつ拝読するつもりです。

「血縁を超えた遺伝子」というフレーズは、さまざまな所から移住してきた人々が自作農を共同で始め、血のつながりではない志をともにした縁で結ばれた人々を形容した言葉として使われていたものを拝借しました。どんなに素晴らしくても実践的な営みはその場で消化されてしまえば後に残らない。有形無形の優れた資産を受け継ぎ、後の知見に役立つものとして可視化していく。その意義深さを世に送る仕事をするという遺伝子の存在に感動しました。最後に実際に大村先生の授業をじかに受けて見たかった、どんなふうだったのだろうと想像を膨らませながら寺子屋参加を終えました。ありがとうございました。